



1 啓蒙思想家の活動

▶ pp.183～185

解説▶ 天賦人權と学問の意義
 (福沢諭吉『学問のすゝめ』)

『学問のすゝめ』初編冒頭の文章である。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という有名な箇所は、「アメリカ独立宣言」の中の「われわれは、自明の真理として、すべての人は平等に造られ、造物主によって、一定の奪いがたい天賦の諸権利を付与され、その中に生命、自由および幸福の追求のふくまれることを信ずる」(ジェファソン、高木八尺訳『独立宣言』「世界の名著」33 中央公論社)という文章の趣旨を福沢流にかみくだいたものであるとされる。「万物の霊……趣意なり」の一文は、生存の維持、自由と幸福を追求する権利が天賦のものであることを主張するもので、独立宣言の「生命、自由および幸福の追求」が天賦の諸権利に含まれるという文言に対応しているといえることができる。後半部に出てくる『実語教』は、鎌倉時代ごろに作られた児童教訓書で、日常道徳や学問の大切さを説く。近世には寺子屋の教材として広く普及した。

一身独立して一国独立する

近くは我(わが)日本国にても、今日の有様にては西洋諸国の富強に及ばざる所あれども、一国の権義に於(おい)ては、厘毛(りんもう)の軽重(けいちょう)あることなし。道理に戻(も)りて曲を蒙(こうむ)るの日に至(いたり)ては、世界中を敵にするも恐るゝに足らず。初編第六葉にも云へる如く、日本国中の人民一人も残らず命を棄てゝ国の威光を落さずとは、この場合なり。加之(しかのみならず)、貧富強弱の有様は天然の約束に非ず、人の勉と不勉とに由(より)て移り変る可(べ)きものにて、今日の愚人も明日は智者と為(な)る可く、昔年の富強も今世の貧弱と為る可し。古今、其例少なからず。我日本国人も今より学問に志し氣力を慥(たしか)にして、先ず一身の独立を謀(はか)り、随(したがっ)て一国の富強を致すことあらば、何ぞ西洋人の力を恐るゝに足らん。道理あるものはこれに交(まじわ)り、道理なきものはこれを打払はんのみ。一身独立して一国独立するとは此事なり。

(注)「権義」は「権理通義」のこと。「権理通義」とは、生命・財産・名誉を侵害されない権利のことをいう。

(『学問のすゝめ』「福沢諭吉選集」第3巻 岩波書店)

独立とは

独立とは、自分にて自分の身を支配し、他に依(よ)りすがる心なきを云ふ。自(みず)から物事の理非を弁別して、処置を誤ることなき者は、他人の智恵(ちえ)に依らざる独立なり。自から心身を勞して、私立の活計を為(な)す者は、他人の財に依らざる独立なり。人々この独立の心なくして、唯(ただ)他人の力に依りすがらんとのみせば、全国の人、皆依りする人のみにて、これを引受(ひきうく)る者はなかる可(べ)し。

(注)「引受る」とは、国家の統治や公共の事業に自主的に参画することをいう。独立心のない人間は、すべてを他人任せにして自分の生活を守ることだけに汲々(きゅうきゅう)とする。国家を憂うこともなく、外国の侵略を受けても他人事のように無関心である。国民がそのように「水くさき有様」では、とうてい国家の独立は保てない。それゆえ、外国の侵略から自国を守るためには、国民の間に自由独立の気風を広めることが必要だと福沢は考えたのである。

(『学問のすゝめ』「福沢諭吉選集」第3巻 岩波書店)